

COSMOS集



洋書 三沢 左 右 大阪

「あすなる集」特選

アシモフもハインラインもつくづくと月ながめけむ人住む月を見栄を張り開きし洋書閉ちたれば開きしページもはやわからず日本語は黙読すれど声ひびき洋書は読めどただ沈黙す

三本爪のフォーク巻き取る生ハムをむかへて唇ははつか開きぬ
セーターをベロの態なちしてはみ出でて男の尻をワイシャツは舐む
片腕 杉本 なお 静岡

歴代の猫ことごとくその人を見れば逃げ出すその人が来る
何回か冬を過ごせばサボテンの棘も毛皮に進化しますか
片腕をあなたの腕に巻きつけてわたしのペースで歩いてもらふ
おしるこの缶を両手に包み込む雪だるまならもう融けてゐる
はぐれてもまた会へるのか試したい手にあたたためておく五円玉

思春期王道 手嶋 千 尋* 福岡

海越えて視察の一団やってくるカウンターで待つ指白くなる

想定のQ&Aは先方のキャンセルにより妄想となる

口数が減つてによきによき背が伸びて思春期王道あゆむ彼らは
かつお菜が六割引きで売られおり年明け博多の八百屋店頭
はらはらと待たなくてもいい午後五時半 稀勢の里関きのうで引退

二センチ分 柳井 政 則* 兵庫

居眠りと御喋り、相槌、聞耳で散髪屋さんの一時間過ぐ
無駄な時を過ごせる場所が減っていく散髪屋、銭湯、純喫茶
悩みごと二センチ分は軽くなる散髪屋出て帽子かぶれば
無言の人、会釈する人、礼言う人エレベーターの「開」を押すとき
図書館の高齢男子本読み「時」を啄み一日過ぐす

空を吸いこむ 文野 美恵子* 高知

柔らかき干し柿丹色に艶めいてやつぱり今が食べごろでしょう
初日の出見んと一人で飛びだして冴えざえとした空を吸いこむ
権太坂を機関車のごと走り行く駅伝選手の大股筋美し
離れ住み甘えることもない三女たまにはぎゅうつと抱いてやりたい
冬の田に鴉飛びかかうさま遠く初雪ほのかに舞いはじめたり

顔が嫌ひだ 大越 巖 福岡

電話帳に記しし名前つぶやきて線をひく母八十六歳
火を燃やすことは昔のものがたり焼べるといふ語聞かずなりゆく
何といふ鳥なのかしら 巧緻なるその巢歌会にもち来たる友
今だからいふんぢやないが悪代官カルロス・ゴーンの顔が嫌ひだ
理容タイガー、高砂食堂いまはなく花春町の名のみ残れり

やつぱり好きだ

緒方 真紀子 佐賀

どんよりと空が重たい十二月ゴロゴロ具材でシチューを煮込むもみぢ谷に聞こえる異国語もきつと称へあるらむこの紅葉を飛行機に乗れば九州嬉しいと孫がいふからお節がんばる色形良きだいたいを挽いできて餅にのせたら少し大きい雲を脱ぎ青空広がる冬の朝かがやく光がやつぱり好きだ

逃さずキヤッチ

笠井 秀子*徳島

正月に家じゅう孫の声降って逃さずキヤッチすわたしも夫も十人の寝息こぼれる正月の早ばや過ぎて今宵の静けさ

婦省子の言葉あため折おりに小出しにする夫もう小正月腹開きされて干されてそのあげく加熱の身の上鱈の干物は祖父母、父母もはや声なく姿なく宇宙の果てのようなる郷

神社の冷氣

三浪 治子 三重

年末の奉仕作業に集ひ合ふ八時三十分の神社の冷氣年の瀬の買物かごに加ふるや櫓のほひする軽きまな板

大晦日九人が来て声高しわが家猫の姿は見えす

三日月と金星まるでイヤリング家事を了へたる有明の庭初売りの店のトイレを磨けるはわたくしよりも年高のひと

猫と付き合う

池内 祥子*愛媛

北の地で暮らしし名残りの薪ストーブ焚きつつ戻る若き日の冬薪走る炎はゆらり舞うように激しくやさしくストーブの中人間の裏と表に疲れたら表で生きる猫と付き合う

靡きたる雲を茜に染めながら今年はじめの太陽昇る冬耕の土裏返り黒々と闇を吐き出し陽の力獲る

十八のわが背

浅田 みどり*東京

娘なるひとのイライラ一身にうけて黙せり車中の媪叱る子と叱らるる老母の降りゆけばバスの客らは深く息する十八のわが背見たり黄昏に図書館をいで帰路辿るとき小春日の手すさびごと豆選れば一升の小豆七合になる家の前通る学童ひき止めて欠けたる太陽見する夫あり

埼玉仕様の空

柿田 かず子 埼玉

母逝きぬ一月十日の午後二時半東松山医師会病院十二月二十九日の夜転び立つことかなはぬ身となる母は亡き父や祖母の来たれる気配せり母葬送の朝の厨に少しづつ片付いてゆく母の部屋もとから何もなかつたかのやう良い天気と母の声する心地して埼玉仕様の冬晴れの空

俳

故田 中伸子 大阪

新しい服買って化粧品買って明日は病院こはこは行くぞ俳の思ひがけない訪れに心の不思議おもふ冬の日三毛猫もぐつすり眠る真夜中に何人の人泣いてゐるだらう政治とは国を元気にする為にあるのでせうねいつの時代も南天の赤い実みんなけふ切られ小鳥のゐない庭となりけり

鯛 一匹

磯部 剛*新潟

今年もまた鯛一匹を送り来る佐渡に住みたる漁師の従兄

丸ごとの鱒一匹を捌く妻われは近くで大皿を持つ

蒲団から首半分と手の先を出して読みおり歌集『六六魚』

街灯の光の底にさらさらと粉雪つもる酒の帰り道

達人の筆になりしか雪の野に魚野の川は太く流るる

八年間 黒川 山 タイ子 岩手

一生の時間の使途を数字にて僧は論しぬ「今が本番」

命には限りがあると気づかされ刻々しづむ夕陽のいと

おだやかな看護師の声「おだいじに」古典音楽ながるる医院

八年間住みゐるし仮設住宅の撤去近づき越しゆく人よ

被災者の八年間にかかはりて涙で送るわれ民生委員

うさぎのダンス 黒川 典子 愛媛

新玉の春のみ空を白竜が昇るが如き雲立ち上る

オリオン座を見よと夫よりメールあり旅先に空を見上げをら

ベテルギウスと見紛ふ如き飛行機が点滅しつつ向きを変へ行く

菜園に初めて抜きし大根は足をねぢりてうさぎのダンス

山茶花の赤きつぼみの一輪を孫少年は瓶に挿しをり

をぢさま 新宅 道 和 広島

みぞれ降る師走の日本語教室のすりガラスの窓に信号映る

をぢさまとオヤジの違いは肌だといふCMに乗せられクリーム買ひぬ

しつかりと「ナバ」の味するヒラタケぞ無人の店に今朝買ひたるは

医者もやはり病気で死ぬのか二代目の先生食道がんに逝きたり

耳にへばりつきたるごとし民放の女子アナウンサーの声はいづれも

「不良定年」読みつつおもふ当てはまるところの多しこれでいいのだ

初風 呂 須磨 洋次郎 東京

これといふ吉事は無くも平凡に一年終へてわれ満足す

落葉踏む音を連れ立ちひとり行く雑木林に年は暮れゆく

先送りの煤払ひなるも漸くに済ませり今日は大海日なるに

狭隘の庭に蠟梅ほつこりと梅に先駆け新春を告ぐ

初風呂にひたりて微かに残りゐる若さ温めてやるぞ今年も

鳴門 金時 片山 清子 和歌山

鳴門でのカレーライスに皮つきの鳴門金時コロコロ盛らる

陶板に焼かれゴッホの「ひまわり」をスマホにおさめズームしてみる

瀬戸内の船より見上ぐる広き空吾の山峡の三倍はある

「えんぴつで百人一首」なぞりつつ声に出し読む秋の夜長を

あやめ柄叔母の形見の着物きて百人一首の読み手つとめる

バイトウ 星 キイ 新潟

久々に大白倉の「バイトウ」を見に出かけよう月のぼるころ

「どぶろくもあけよ」と声するもうもうと煙と熱気のバイトウの中

中空に月かかるころバイトウの中にはじまる天神はやし

舞ひ上る炎とけむりと爆竹に「ブラボー」の声と拍手わく

さりさりと夜半に雪降る音を聞くこともかなはず二重のサツシは

押す 石沢 いくよ 静岡

裸木となりし庭木を身に押せば弾力ありて顔を殴らる

家並のくつきり黒きシルエツト寒の夕日が今沈みゆく

寒空に夫は何処まで行つたのか夕餉に帰る子供のやうに

牧の原茶園を抜けて買ひに行くわが家好みの冷凍餃子
啄木のうたの幾首を口ずさむ十六歳の吾に逢ふため

わが歌集 摩尼和子 新潟

拙けどわが歌孫の六人に残しおかむと歌集編みをしり

孫らへの贈り物なるわが歌集編まねばならぬ得がたき経験

今迄と全く違ふ心臓発作歌集成るまで続けよ鼓動

平成三十年師走の半ば医師にねだりぬ三月の命を

命にはどうしようも無い事有ると言ふ正直なりし医師と真向かふ

星になる母 北野カズミ 福岡

ゆく年を越して欲しくてむくみ来し母の手足をさすりてゐたり

納棺は色留袖に輪袷袷かけあはく化粧す母の旅立ち

抱きしむる軽き白骨たしかにも百年を生き星になる母

十五年母の住みたる施設前終のわかれに霊柩車寄る

生ふるとこ日陰ゆゑかな年越してなほ食べられるうちの青じそ

美化せずに 氏家かね子 宮城

目覚しのベルは号令 独り居の自在にけぢめつけて鳴りをり

七回目目の吾の亥年がめぐり来てこの歳月の今は愛しき

母われの歌を知らざる息子らが短歌講座を休むと言ふ

美化せずに描きし海かゴーギャンのタヒチの海のこの色合ひは

モンマルトル描くユトリ口の心情の謎を思ひて(白)を見つめる

今宵はひとり 内田 妙熊 本

スパーに溢るるばかりの棚の品年の瀬混み合ふ人を見てをり

嗅覚の衰へなげきゐるわれにらふ梅の花うつむき加減
巻きずしとトマト小松菜持参して姪は手早く膳ととのへる

料理上手の明るき姪の声残るわが食卓に今宵はひとり

小豆がゆあつあつの椀供へたりセピア色した父母の写真に

気構へひとつ 坂口 多佳子 鹿児島

貼り替へし障子に初日は射し始め独り迎ふるこの新年も

練りごとをわれに言ひても聞き役はわれしかゐない一人暮らしは

白足袋を履くこともなき新春を気構へひとつ羽織ることとす

今朝掃きし庭に逆さに落ちゐる椿の一夜おもてに直す

母逝きし齡となりぬ掲げゐる遺影は妬むほどの頬笑み

寒九の水 古寺志津 新潟

今日もまた坐骨神経痛「いたいよ」と叫びたくなる独り居の夜

一粒の白く小さき痛み止め満身創痍のわれを助くる

効き目あれ寒九の水で呑む薬 喉のゝど・体内冷しつゆく

先生は「痛いよ」と言ひながら打つ局所麻酔に歯を食ひ縛る

食ひ縛る歯からもれ出す呻き声ぞ知らぬふりか先生無言

長寿延命黒卵 高橋光子 静岡

十年ぶりと娘は言いて駿河湾の初日を夫と拝みに行けり

輪島塗のお屠蘇のセット並べれば「かつこいい」と盃をとる孫

譲り受けし三段重ねの重箱の隅の漆は剥がれかけてる

お土産の長寿延命黒卵そうか私も高齢者なんだ

初釜の和服の人ら相乗りて新幹線は華やぎにけり

大落暉追いかけるごと新幹線、冬景色の中走り抜けたたり

明日のために 武田利子 北海道

玄関にどさつと置かれる大きな箱千葉産ミカンに孫よりとあり顔あげて歩きなさいよと娘の言へど無理だとおもふ引つくりかへる日曜の買物あるきに疲れし足しつかりと揉む明日のために押しして押しして押しと見せかけ引き落す安美錦の土俵を考へつつ見る年ごとに寒のきびしく着ぶくれて達磨のごとく無言で坐る

バシリスク 村上笑美子 宮城

食パン一斤かかへて川辺に千切りをる人に寄りくる候鳥あまた亡き人の名刺を逆さに差し替へて住所録札すちりに慣ひて一列に並び園児ら投函す誰に宛てしや年賀ハガキを

斯うすれば川を歩いて渡れるとふ詭弁を地で行くバシリスク見事銭湯に入りし頃には陸湯といふ言葉ありしも死語となりたり再びは履くことのなきハイヒール最後の一足捨てられず 在る

時の散歩道 近藤卯月*愛知 「その二集」特選

埼玉に行きたいのです東京はサクッと通過したいのですよどうやって乗り換えるのか検索をしないとまるでわからないですついに来た小江戸川越「時の鐘」黄昏空にスマホをかざすシャッターが一つまた一つ降りていく小江戸の街は時の散歩道蒸籠から湯気もうもうの芋菓子暖めていく冬の川越

小言の予感 星野尚子*新潟

今朝の雪青空に飛び乱舞する風をまとって我を誘いに

母さんがせかせか掃除を始めたら子供に小言が降り出す予感大好きなホットミルクを飲みながら「こたつだなあ」とほほ笑む娘あどけない君の涙を見るたびに家族が笑顔になつてしまふの正月のにぎわい逃れあふれ出す頬の涙を月が見ていた

平成という林檎 工藤亜希子*神奈川

きり雲は音なき餅 山々をかすめたなびく阿蘇の雲海平成という林檎に蜜の時間あり例えば真央のトリプルアクセル平成という林檎に酸っぱき時間あり例えば北のミサイル実験 晩白柚を水滴つたう そのように涙こぼせり元横綱は恋という我が人生の取りこぼしマリア・カラスの歌声に聴く

雪の細道 吉田真弓 北海道

一人踏みまた一人踏み出来上がる雪の細道新雪の朝人一人通れる幅の雪の道譲り譲られ歩み行きたり譲りあひ歩く細道すれ違ふ一人は雪に片足入れてキッチン窓に飾れる松の枝の緑鮮やか雪降る朝は元号を並べたる表案内に遠くて近し大化と平成

ひとつぶの菓子 前中映東京

夏草が夏を仕舞つてゆくときのにほひと思ふ中川の土手列長きプラスチックバンドの子どもらをしづかに抜いてゆく救急車雨のなか傘もささずに「わかっている」「わかっている」「口論続く傷ついた小鳥のやうなハンカチを誰も踏まずに行く朝の駅ひとつぶの菓子をこぼしたをさな子が秋の歩道にまた振り返る慎重に王子の坂を下り終へ都電がふうと脱力をせり

牧の静けさ 石田 信 夫*鳥 取

認知症の母が「寅さん」見て笑う 笑いは母のいのちを覚ます
老けないと書かれた牛乳飲み続け鏡を覗く いつもの顔だ
放牧の牛は農家へ戻されて雪どけを待つ牧の静けさ

落日の朱に溶け込む刈小田に腰を曲げたる農婦がひとり
着付師の全国一位の美登里さん「スナックぴーぷる」いとなみており

見てくれる妻 水 辺 あ お 静 岡

改札をピッと人ら通りゆき切符持ちたるわれ立ち止まる
刃なす富士の山巒見下ろせり年をまたぎし旅の終はりに
自販機で使へぬ五円玉あまた(こ縁)と神は受けとりくれぬ
クリボッチ、ワンちゃんデート、学生が教へてくれし二語得て辞めぬ
パソコンにウイルス入りて怒るわれふむふむと見てくれる妻

馬と なる 桜 庭 さわね 鳥 取

擦るやうに狭き歩幅で廊下ゆく父のさみしき背に手を添はず
一人住む父のもとへと通ひ来て五年目の春穏やかに明く
九十を過ぎて曾孫にお年玉揃へる父の深き手の皺

流行のルージュを引きし日は過ぎてふたりの孫と絵本をめくる
「x(い)までちゃんとおそんで」三歳にせがまれ夫はまた馬となる

旧かなづかひ 中 村 京 兵 庫

クリスマスリースに似せる台杉と千両飾るキッチン窓
終日を年末寒波にかこつけてストープを背にサスペンス観る

だいだいの色よきお飾りえりもとめ年神様をむかふべらなり
平成は最後、最後と言ふけれど何も変はらぬわが家の歳暮
紅白に椎名林檎の歌詞流れ旧かなづかひに目をこらすなり

造花の小菊 近 藤 幸 子 長 崎

あわただしく暮れの買ひ物出てみれば雲一片もなし晴れわたる
枯草の上になむれる野良猫はやせたる背を陽に当ててをり
玄関に挿したる花のやや乏し元朝出でて蠟梅手折る
水仙の花の衰へきはだてば造花の小菊いきいきと見ゆ
なかなか朝起きがたし霜のあさ小刻みにみる時計の針を

靴 音 島 夏 樹*宮 城

灯の街へつづく舗道の靴音のふたりがひとつの春の夜だった
夕空の星のシグナル仰ぎみる終わりの旅のいまどのあたり
高く澄む青空歩みゆくようだ朝の舗道に秋ひびかせて
消えてゆくほつそりのびたかげぼうし秋の夕日が置いた手紙だ
ひややかな卵の肌はすでに冬黄身がひとりの寒月となる

おはやうおはやう 玉 置 昌 美 和歌山

「おはよう」と笑顔で挨拶くるる児の元気もらひて寒空を行く
ラケットを握ればたちまち十六の少女に戻る古希すぎしわれ
ランドセルからから鳴らしつぎつぎとおはやうおはやう見かけ行けり
わが耳に架けたることを忘れぬてメガネどこよとさわぐ元旦
希望あるかぎり青春と書きくれし八十路の友の賀状に見入る
一升の米たづさへて奈良京都修学旅行は遠き日のこと